

RISSHO UNIVERSITY

FD News Letter

 立正大学

Vol.31
November, 2024

CONTENTS

1 ●令和6年度（2024年度）立正大学FD活動について
2～5 ●令和5年度（2023年度）ベスト・クラス賞 受賞科目紹介

7 ●令和5年度（2023年度）授業改善アンケート実施概要

令和6年度（2024年度）立正大学FD活動について

立正大学長 寺尾 英智

本年度の活動テーマは、「多様な教育手法を活用した授業の展開②」です。大学における多様な教育手法については、アクティブラーニングや反転授業など、従来より様々な形で必要性が提起されてきました。特に新型コロナウイルス感染症の流行への対応により、急激に対応を迫られた問題もありました。その様なコロナ禍での経験をも踏まえつつ、改めて多様な教育方法の活用が求められています。一昨年までの「教育の質保証に向けた取り組みの実質化」を受けて、昨年度よりは改めて教育手法そのものへ立ち振り返り目を向けることをテーマにすえ、本年度は引き続き継承しています。

具体的な研修として前期においては、教育開発センター主催により、外部アセスメント（GPS-Academic 1・3年生）について、全学の集計データのみならず、学部ごとの集計データ等について報告し、今後更に有効に活用していくための機会を提供しました。この研修は昨年に引き続くもので、経年変化を視野に入れ、さらなるデータの活用が期待されます。

高等教育研究機構主催では、コアポリシー（DP・CP・アセスメントポリシー）の点検・見直しについて研修が行われました。本年度の自己点検作業として位置づけたコアポリシーの点検・見直しについての理解を深めるため、外部の専門家をお招きし、講演とワークショップを実施しました。「コアポリシーを見直す視点を説明できる」「コアポリシーが適切かどうかを確認する方法を説明することができる」「コアポリシーおよびそれらを補足する資料の見直しを図ることができる」を研修の到達目標とし、講演とワークショップを通じ



て参加者各自の学部・研究科のコアポリシーの検証作業へのヒントを得る機会となりました。なお、後期の全学研修については、現在検討中ですので、決定次第お知らせをいたします。

全学的な機構改革が進む中で、本年度より全学のFD活動はFD委員会に替わり新たに発足した高等教育研究機構が取り扱うこととなりました。各種のFD研究会等についても、教育開発課よりお知らせしています。

各学部・研究科内においても、それぞれに独自の研修や取り組みが日々進められていることはいうまでもありません。すべての教員と職員が、それぞれの立場で創意工夫していることに光をあて、その成果であるグッドプラクティスを積極的に共有していくことを一段と進めたいと考えています。さらなるご協力をお願いいたします。

令和5年度(2023年度) ベスト・クラス賞 受賞科目紹介 教員インタビュー

〈概要〉

2023年度授業改善アンケート結果より、ベスト・クラス賞を受賞した4名の先生に、授業設計のポイントや工夫をお伺いしました。



鹿嶋 真弓 先生

(心理学部臨床心理学科教授)

受賞科目名：「生徒理解と教育相談A／生活指導の研究ⅠA」

——授業の目的や流れについてお聞かせください。

この授業では、生徒を理解することや教育相談に関する理論を学び、教育現場において実践的な対応力や判断力を身につけることを目的としています。また実際に活用できるようにするため、ケーススタディやロールプレイを行ってきました。

授業の流れとしては、最初に前回授業のリアクションペーパーをもとに、共有したい内容についてフィードバックを行い、深化補充の時間としています。次に、理論を学んだ後、課題を設定しグループワークやディスカッションなどを通して体験的に学ぶ時間としています。特にディスカッションでは、①自分の考えを持つ→②仲間の考えを聞く→③自分の考えを深化させる、といった3ステップで、自身の思考や感情、行動のバリエーションを身につけることができました。

——授業を行う上でポイントにしていることがありますらお聞かせください。

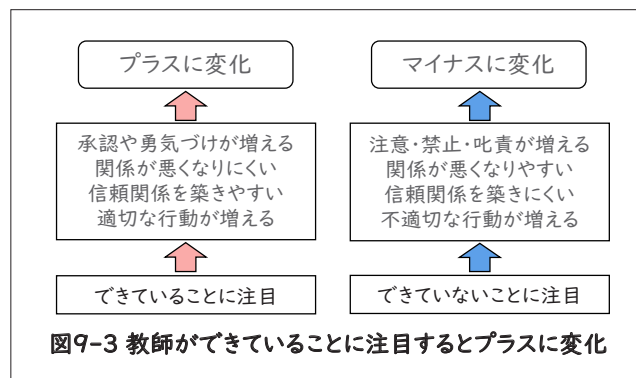
人は得たいものしか得られないので、まずはこの授業で「何をしたい」のか、自ら問いを立てることから始めます。また、グループワークやロールプレイでは、感じたことや気づいたことをシェアし、いろいろな価値観と触れ合う機会をつくりました。一人ひとりの考えを大切に聞くことで、「この授業の主体は自分である」と感じてほしかったからです。また授業を行う上で学生の考えはかけがえのないものであり、彼らが主体となってはじめてより良い授業が展開されると考えています。

——ほかに工夫をされたことはありますか？

教職課程を履修している学生には授業を受ける際に「すでに自分は教師である」という思いで臨んでほしいとシラバスにも明記しています。そこで、授業ではハーバード大学の白熱教室のごとく、マイクをもって学生の中に入っていきます。学生にマイクを向け「これについて〇〇先生はどうお考えですか？」「〇〇先生だったら、その生徒になんと声をかけますか？」というように学生の名前の後ろに先生をつけて進め、彼らがブランド・ハプンスタンス・セオリーのスキルを実感することで、教師としての意識や姿勢が芽生えてくるようにしました。

——授業アンケートでは学生からどのようなコメントがありましたか？

「グループ活動や1人の意見だけではなく、多くの人の意見を共有できたところがよかった。」「授業中の資料や話が一番分かりやすく、とても楽しい授業だった。」「豊富な現場経験のことを聞くことができるので、より理解しやすかった。」「先生の体験談と教科書の内容を織り交ぜてわかりやすかった。」などがありました。



3-1. なんと声をかけますか？：事例②



『解決』の方法は
自分が知っている
ことに気づいていないだけ

なるほどねえ～(受容)
で、どうする？(質問)

出典：「教育相談の理論と実践」(オンライン講座edu step)、鹿嶋真弓、学研

3-2. なんと声をかけますか？：事例③



・できていることを認める
・前よりもできるよう
になったことを認める

～できたね！(承認)
前より～になったね！
(変化に気づく)

出典：「教育相談の理論と実践」(オンライン講座edu step)、鹿嶋真弓、学研

——授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

単に教員免許取得のためだけでなく、社会に出てからも役に立つ授業内容となるよう工夫をしていくこと。また念願の教師になっても、リアリティショックなどで退職することがないように、より多くの事例に触れさせてあげること。また、すでに教師となった自分を

イメージし、それを実現できるよう授業を構造化していきたいと考えています。そして何よりも「先生になりたい」との思いがある学生が一人でも多く教育現場で活躍できるよう、この授業を通して資質能力を伸ばしていければと思います。

——ありがとうございました。



林 恵 先生 (本学非常勤講師)

受賞科目名：「特別支援教育概論C」

——授業の目的や流れについてお聞かせください。

障害の有無に関わらず様々な子どもたちが同じ教室で学ぶ今の時代において、支援を必要とする子どもたちは特別支援学校に限らず通常の学級にも存在します。また支援の在り方も多様化しています。

この授業はインクルーシブ教育の理念を理解し、障害やその他のマイノリティに属する子どもたちに関する知識と対応を考えることを第一の目的としています。授業の冒頭でWebClassに提出されたリアクションペーパーを基に学生の意見を共有し、障害やマイノリティの属性、教育に関する環境や制度などのテーマを設定し理解を深めることを目指しました。

——授業のポイントや工夫をされたことはありますか？

授業では具体的に子どもたちと教育環境の状況を知るため必ず動画を用意しました。YouTubeからドキュメンタリーなどを選ぶ場合もありますが、知り合いに頼んで撮影させてもらったものもあります。またゲストスピーカーとして障害児を育てる友人を授業に招いたこともありました。学生がイメージしていた「大変

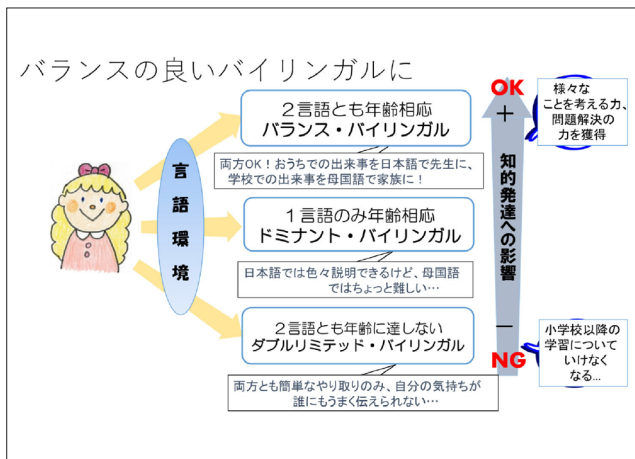
な子育て」ではなく「晴れだと思ったら雨が降っていただけ」という友人の話は、学生に強く印象を残し、障害児とその家族に対する思い込みに気づく授業でもありました。

近年の大きな課題でもある、外国人の子どもの教育についても詳しく説明しました。特に学齢期の外国籍の子どもに義務教育は適応されていないことや、母語保持の重要性などについても話したところ、大変驚きをもって捉えてもらいました。子育てに悩むアルバイト先の外国人スタッフに「子どもには母国語で話すことが大事」だと伝えた学生もいました。

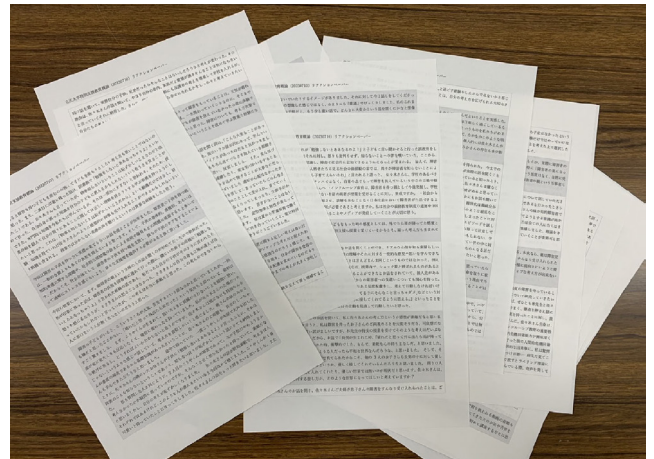
またこの授業の展開の軸はリアクションペーパーにあったと言えます。授業冒頭での感想や意見の紹介からリアクションペーパー上での意見交換が自然発生しました。回を重ねるごとにその内容が感想から語りへと変化し、自分の経験と照らし合わせながら内面の変容を語り、新しい世界を知ろうとする意気込みが感じられるものが多くなりました。障害児者やその他のマ



「障害児と家族の理解」ゲストが家族の紹介をしている場面



外国人の子どもへの特別支援教育
母語の保持の重要性についてのスライド



リアクションペーパー
文字数は制限をしていますが、多くの学生
が時間をかけて取り組んでいるようです。

イノリティの人たちに思いをはせる時、自分自身の価値観を振り返らざるを得なくなります。受講前の「障害児ってわからない」「教職だからとりあえず取るけど多分あんまり関係ない」を超え、対象が自分の枠に入ってきたときに、内面に起きた変容を生き生きとした言葉で表されているリアクションペーパーは本当に私にとって意義深いものとなりました。

——授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

受講生の興味が高まるにつれて、さらに深く学びたいという意見が多く寄せられます。どうしても半期の授業では伝えきれませんし、学生の同士で意見を交換し深めていくには時間的な限界があります。私はこの

授業が考えるきっかけになるように情報の提供をしていければよいと思っていましたが、授業外での意見交換の場を設ける方法を模索する必要性を感じています。例えば、リアクションペーパーの内容を基にWebClassでいつでも意見交換できるような仕組みを利用する方法もあるかもしれません。非常勤講師でするのでできることも限られていますが、将来的にはインクルーシブ教育を超えて社会の中でどのように全体の人の心地よさを実現していけるかを考え続ける、そんな場を作って学生へ提供していければと思っています。

——ありがとうございました。



門脇 大輔 先生

(社会福祉学部子ども教育福祉学科特任講師)

受賞科目名：「道徳の理論と指導法」

——授業の目的や流れについてお聞かせください。

この授業は道徳教育の要となる道徳科の特質を理解したうえで道徳性を育む授業を実現するために多様な指導法を用いた授業構想力と実践的指導力を身に付けることを目的としています。道徳教育および道徳科の理論の学修、道徳科指導案の作成の学修、授業動画視聴による授業検討会、模擬授業の実践といった流れで授業を進め理論と実践の融合をめざしました。

——授業を行う上でポイントにしていることがありましたらお聞かせください。

模擬授業においてはグループのメンバーと作成した共同立案（指導案）をメンバーがリレー形式で導入から終末までを実践しました。模擬授業後は検討会を設け授業者役の学生と学習者役の学生とでよかった点や改善点、疑問点などについて検討していきました。

——授業アンケートでは学生からどのようなコメントがありましたか？

演習やグループワークがあることによって学びがより実践的であるところや丁寧にフィードバックをしていることを評価するコメントが多かったです。

これらのコメントから学生が授業に求めているものとして「実践・演習」「教師による肯定的な声かけ」「フィードバック」が浮かび上がってきました。

——授業において具体的にどのような工夫をされた結果なのでしょう。

実践や演習においては学修したことが「できるようになる」ために演習を組み込みました。例えば指導案

が書けるようになるために主題名やねらい、発問といった項目ごとに手順やモデルを示して学修した後に実際に指導案を書いてみる演習を取り入れました。

教師による肯定的な声かけにおいては授業中にマイクを回して学生が発言する際に心理的安全性に留意しました。具体的には「発言に対して否定をしない」「分からないという発言を一つの表現として価値付ける」「今の〇〇さんの考え分かる？と全体共有する」が挙げられます。

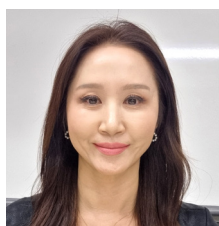
フィードバックにおいては、OPPシート（One Page Portfolio シート）に学生が書いたふり返りに対して短いですがコメントを手書きで書くようにしました。

——授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

私はこれまで学生の思考の文脈を大切にした授業づくりを心がけてきました。私の考える学生の思考の文脈とは「学生はどのような被教育体験も含む既有的知識を持っているか」「学生がどのような問いを持っているか」「学生がどのように考えているか」「学生は何をしたがっているのか」ということです。今後もこれらを大切にしながら授業の流れについて変更調整を行い学生と共によりよい授業を創り上げたいと思っています。

今後の展望としては、小学校現場においてICT活用の実践が行われているため本授業においても道徳授業におけるICT活用について学修できるようにしていきたいと思っています。

——ありがとうございました。



キム ソンウン

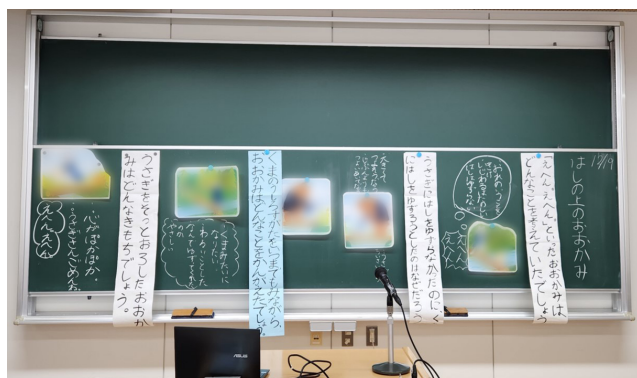
金 成恩 先生

（心理学部 経営学部非常勤講師）

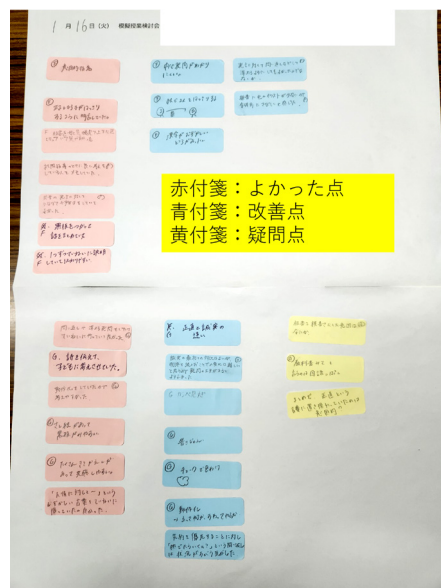
受賞科目名：「コリアの文化とことばB」

——授業の目的や流れについてお聞かせください。

この授業はコリアの文化とことばを学ぶことによってコリアへの理解を深めることを目的としています。食文化をはじめ住宅文化や伝統文化、学校制度や祝日の過ごし方など韓国人の生活全般にわたる知識を得ることができ、またハングル文字の読み書きや基礎的な自己紹介と会話ができるようになります。授業では毎



学生による模擬授業の板書



授業検討会で使用したシート

回文化とことばの練習を行っています。前半は文化を説明し後半はことばを練習しますが、ことばの方だけでも会話と文字の練習があるので「文化→会話→文字」の流れで学生たちにとって飽きのこない構成になっていると思います。

——授業を行う上でポイントにしていることや工夫をしていることがありましたらお聞かせください。また学生の反応はどうでしたか？

受講生の多くが韓国に興味を持っていることもあってとても積極的に授業に取り組んでくれています。ですからことばの吸収も早いです。教える側としては大変恵まれた環境ですので申し分ないのですが、その中でもいくつか工夫している点をご紹介します。

まず文化の面では漠然としか知らないコリアという国に対してイメージしやすいようになるべく写真や動画を使って説明をしています。特に日本との比較を通して説明すると学生達は興味津々で理解もしやすいようです。また私の経験談を交えながら説明すると印象に残るようで、そのことをアンケートに書いた学生も

多かったです。

ことばの面では「文字が読める・会話ができる楽しさ」を感じてもらえるよう心掛けています。クイズ感覚でスライドに出された文字を1人1人読んでいきませんが「読んで終わり」ではなくその単語を使ってフレーズまで練習します。そうすることによって応用力が鍛えられ会話力も向上します。外国語でいろんな表現が話せることに学生たちは喜びを感じるようです。その喜びが次の授業へのモチベーションとなり授業を受けることが楽しいと言ってくれます。また毎回復習をしています。同じ表現を何度も復習することによって自然と覚えられるので、反復して練習することがいかに大事かを知った、と言う声が多いです。

あと、学生たちが喜ぶ授業内容の一つは、K-POPやドラマを使った授業です。文字が少し分かるようになったら歌詞やドラマのセリフの中から単語やフレーズを取り上げて会話を練習しています。

——授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

K-pop やドラマはもちろん、留学先や仕事先として

コリアの食事作法（マナー）

- ①ご飯は**左側**、汁物は**右側**におく。
- ②スプーンと箸は**汁碗の右側**に置く。(スプーンを**内側**に置く)
- ③年長者が席に座り、食事を始めるまで待つ。
- ④最初はスプーンで汁物を一口飲む。
- ⑤茶碗や汁碗を**手で持たない**。
- ⑥汁物にご飯を入れて食べてもO K。

も韓国に関心を持つ学生が増えている中、教室での説明だけでなく韓国の文化イベントや日韓交流会などの情報も提供していくことで学生たちに実際に異文化を体験してもらいたいと思っています。最後にこの授業を受講した学生は次のステップとしてハングルが本格的に学べる「ハングル1と2」を受講することができますので、引き続きこちらの授業も多くの学生が受講してくれたら嬉しく思います。

——ありがとうございました。

令和5年度(2023年度)授業改善アンケート実施概要

立正大学では自己点検・評価の一環として、大学では2000年度から「授業改善アンケート」を、大学院では2009年度から「大学院生の教育・研究環境に関するアンケート」を実施し、学生からの要望・意見等を教育・研究環境の改善に活用しています。

〈実施期間〉

■第1期 2023年7月3日～7月15日

■第2期 2023年12月4日～12月16日

〈対象科目〉

1期は1期科目、2期は2期科目および通年科目の全科目。ただし、受講者数5人未満、ゼミ、卒論、学修の基礎、オムニバス科目、集中科目については、学部ごとにアンケート実施の可否を決定。

〈実施方法〉

実施期間の該当科目授業時間中に原則的に実施。スマートフォン等からWebシステム「C-Learning」(以下、「Webシステム」)より回答。

アンケートの集計結果は「授業アンケート」の報告書に、大学については学部編として、大学院については大学院編として載しています。

最新の「授業アンケート(学部編、大学院編)」 (デジタルブック)

2023(令和5)年度版(令和6年3月発行)
(デジタルブック)

※デジタルブック画面より
PDFデータ出力が可能

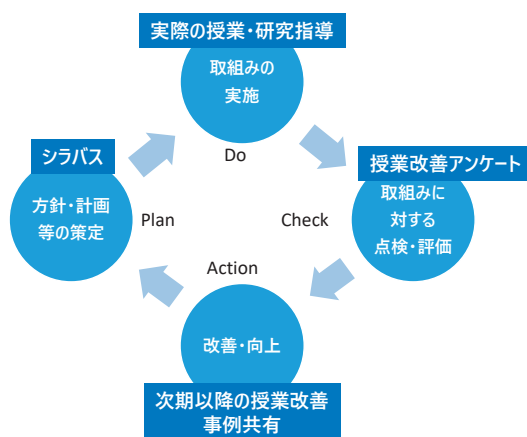


Summary

前向きな授業改善アンケートの実施・活用をめざして
教員が授業改善アンケートを、前向き、かつ、積極

的に、実施・活用していくためのきっかけづくりとして、今回は『教員コメント』を入力している科目は入力していない科目と比べて満足度が高い傾向にあるのではないか」という仮説について分析を行いました。

単に授業改善アンケートの実施に留まらず、その結果を組織的に活用することや、学生を単なる回答者として以上に参画させることを目指して、今後も授業改善に寄与する取り組みについてさらなる検討を継続していきます。



授業改善アンケートと内部質保証

近年、高等教育において特に重視されている内部質保証は大学自らが、自主的・自律的に教育・研究の質を向上させることが求められ、大学レベル、学部レベルなど様々な階層・側面での取り組みがあります。このうち、個々の授業科目レベルにおいては、この授業改善アンケートを積極的に活用し、上図のような質保証のPDCAサイクルを有効に機能させていくことが重要となってきます。

編集後記

第31号では、令和5年度のベストクラ賞受賞の4名の先生へのインタビュー、そして、令和5年度の授業改善アンケートの実施概要を中心に掲載しました。各先生、特に他学部の先生の講義について知る機会が少ないのが現状だと思います。本ニュースレターを通じて、ベストクラス賞を受賞された先生の素晴らしい工夫を知っていただき、皆様の講義に活かして、学生たちの成長につなげていただければ幸

いです。2024年度より学内の組織が一部再編されました。組織再編の移行期にあったため、第31号の発行が少し遅れましたこと、お詫び申し上げます。今後も本ニュースレターを通して、意義のある情報発信ができればと、担当部会として考えております。

(教育開発センター FD 部会長 経営学部 教授
藤井 博義)